

■大江戸繁昌双六の解説

本双六は明治 22 年の発行で、将軍、奥勤めの女房、大名の行事祭礼が生き活きと描かれており、大都市江戸の繁盛ぶりが伝わってくる。

本双六の 2 2 のマスの構成は次頁参照のこと。振出しは、元旦の大名登城の場面。上りは、おめでたく「安賀利」と記されており、将軍による日光御社参の場面だ。

マスに描かれている事で説明の必要なものについて以下に記す。

- ・御能拜見（おのうはいけん）・・・江戸城内本丸の広場で演じられる能楽を町人が許されて観覧すること。将軍の代替わり、その他祝い事の際に臨時に催された。
- ・御煤掃（おすすはき）・・・正月の準備に、煤や埃などをはらってきれいにする。江戸時代には公家・武家ともに一二月一三日に行なうのが恒例で、やがて民間でも多くこれになった。
- ・御鷹野（おたかの）・・・将軍や大名が鷹を使って山野で鳥獣をとること。鷹狩。
- ・栗橋舟渡シ・・・日光道中の栗橋宿と中田（なかだ）宿とを結ぶ利根川の渡しでのこと。この間の利根川を房川と称したので、房川渡（ぼうせんのわたし）ともいう。常水では川幅約 40 間、川丈 9 尺ほどで、川丈が 1 丈 2 ～ 3 尺になると船止めとなった。栗橋宿には御用船 2 艘・茶船 5 艘・馬船 2 艘が備えられていた。将軍の日光社参の際には臨時に船橋が架けられた。
- ・日光御社参<上り>・・・徳川家康の命日に行われる日光東照宮の 4 月の大祭に将軍みずから参詣した。

※1776 年の徳川家治の社参時には供奉の大名・旗本やその家臣、武蔵・下総・下野などの村々から動員された人足を含め延べ 400 万人・馬 30 万疋・金 22 万両を要した。また徳川吉宗の社参のとき、利根川の房川渡に船橋を架けるのに 2 万両の費用がかかったという。名や旗本の社参ではそれぞれ日光山内に宿坊が定まっております、拝礼には江戸城中での服装が着用された。

■大江戸繁昌双六の構成

栗橋舟渡シ	福びき	安賀利（上り） 日光御社参		御猪狩	御花見
御鷹野	若様御馬	万歳	御上洛	御進發	今様
御煤掃	上野御参詣	御舟御成	御姫様おかご	御姫様道中	山王御祭禮
御能拝見	大名御入國	振出し 元旦登城		御盃頂戴	江戸入り